



Title	地域日本語ボランティアに求められる力量
Author(s)	川嶋, 恵子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2006, 40, p. 37-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8849
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

地域日本語ボランティアに求められる力量

川 嶋 恵 子

1 はじめに

1.1 在住外国人と地域の日本語教室

1990年の出入国管理及び難民認定法（入管法）の改正・施行などの社会状況の変化に伴って、外国人登録者の数は増加の一途をたどっている。それに伴い、国内における日本語教育の対象者も、留学生や就学生、外国人研修生などだけでなく、定住者や日本人の配偶者など、日常生活を送る上で必要な日本語を学習する外国人が増えており、多様な文化背景を持った日本語習得を必要とする人に対して、それぞれのニーズに合ったきめ細かな支援が必要となってきた（野山 2002、山田 2004）。そして、彼（女）らの日本語学習を支える多くが地域の日本語教室であり、そこで活動するボランティアとなっている。

文化庁国語課のホームページでは、ボランティア団体による日本語教室について、「在留外国人が地域社会で生活するようになってきており、これらの者が地域の生活に円滑に適応できるように」提供される日本語学習機会であると述べられている。尾崎（2004）が大学や日本語学校で行われてきた「学校型」日本語教育に対し、全国各地で展開されているボランティア主導の日本語教室を「地域型」と呼んでそれぞれを区別している¹⁾ことからわかるように、地域の日本語教室は大学や日本語学校とは異なる目的を持って活動が行われる場となっている。

1.2 日本語ボランティアの「力量」

地域の日本語教室には様々な背景（職業・日本語教育／研修歴・資格など）を持つ人たちがボランティアとして参加している（福島 2004）。また、自治体等で「日本語ボランティア養成講座」を催した時に多くの参加者が集まることを考えると、社会の様々な人がボランティアに関心を持っていることがわかる。

尾崎（2001）は、教室の中で意図的・計画的に学習が行われる狭義の日本語教育に対しての広義の日本語教育、つまり、教室の中に限らず、非計画的・非意図的に行われる日本語の援助や支援は、「外国人と日本語で接する人なら誰にでもできること（p.8）」だと述べている。しかし、日本語を話すことができれば本当に誰にでも日本語学習支援ができるのだろうか。

青木（2004）は実際の学習活動の録音・録画資料、インタビュー資料を分析し、ボランティアと学習者の意識、希望にずれがあることを指摘した上で、支援活動を改善するために、ボランティアが学習者の「学び」の実態を知ること、学習者が自分の学習を主体的に管理できる活動を取り入れることを提案している。また、森本（2001）は、ボランティアの語りを分析し、無意識のうちに「先生－生徒」という権力的な関係が構築されていることを指摘し、常にボランティアと学習者その他の関係者間の関係のあり方を検討すべきだ、と述べている。これらから分かるのは、日本語学習支援は誰が行っても、何を行ってもよい、というものではなく、そこには特別な思考が必要だということである。

野山・有田（2004）をはじめとする先行研究では、多様な人たちが関わる日本語教室を維持・運営していくためには「コーディネータ」の存在が不可欠であるとされ、コーディネータの資質や能力が議論されたり、コーディネータ養成の必要性が述べられたりしている。コーディネータには、

日本語学習支援にかかわるボランティアや日本語交流員と呼ばれる人々をつないだり、様々な企画を発案したり、事業を展開していくための仕込みをしたりするというつなぎ役が求められている(野山・有田 2004)。もちろん、このような力をもったコーディネータの存在は教室の存続には欠かせないが、実際に学習者と関わるのは個々のボランティアであり、ボランティアに求められる思考の仕方や資質、能力は、コーディネータのそれとは異なるものであることは自明である。このような日本語学習支援に必要な力を、本稿では「力量」と呼ぶことにする。そして、ボランティアの力量を高めることなくしては、コーディネータをどれだけ養成したところでよりよい支援活動ができるものではないと考える。

Freeman (1989) では、よい語学教師の要素としてknowledge (知識)、skills (スキル)、attitude (態度)、awareness (気づき) の4つが挙げられている。上で述べた日本語ボランティアの「力量」にもこの4つの要素が必要であるだろう。つまり、理論的な知識や経験的な知識をも含めた目標言語である日本語に関する「知識」、言語を教えたり活動を展開させたりするための「スキル」、相手との接し方や活動についての自分の信念といった「態度」、常に自分自身と学習者を客観的に見つめた結果である「気づき」の4つの力がボランティアの「力量」を形成するものであると考える。本稿では特にこの中の「態度」について、ボランティアにどのような力量が求められているのかを考察する。

2 研究の概要

2.1 Narrative Inquiry

本稿は、あるボランティアの経験を理解し、ボランティアに必要な力量を考えるために、質的研究手法の一つである Narrative Inquiry (以下 NI) を用いて行った研究の一部である。

NIはClandinin & Connelly (2000)などによって提唱されているもので、経験を研究する方法である。経験はそのことが起きた状況や経験した人の歴史や場所といった文脈の中で得られるものである。そして、研究参加者はその文脈との関係性の中にあり、さらに研究者は研究参加者との関係性の中にある。NIはこれらの複雑な関係性を無視することなく、研究参加者や研究者、フィールド、社会といったあらゆる関係性の中で、経験を理解するものである。

NIでは、研究者の参与観察と、研究参加者及び研究者の個人的な内省によってデータを収集し、これらを用いて経験を描写的なストーリーにする。また、NIでは研究者自身の内省をもデータとし、研究者自身を研究の全てにおいて研究対象とする。李(2004)は、「Narrative Inquiryは、フィールドにおける研究参加者(教師など)のナラティブを研究者が研究するというアプローチではなく、ナラティブそのものが研究参加者と研究者とのコラボレーションのプロセスであり、結果である(p.89)」と述べている。

日本語ボランティアの経験は、ボランティア、学習者、学習する場である日本語教室、さらにそれらを取り巻くそれぞれの家庭や学校、職場、同僚、社会など、さまざまなものとの関係性の中で成り立っているものである。あるボランティアの経験を理解するためには、その人が関わる多岐にわたる世界と、ボランティアとしての彼女の歴史である時間的連続を考えなければならない。本研究でNIを用いたのは、このような複雑な文脈の中で彼女の経験を理解するのにふさわしい方法であると考えたからである。

2.3 調査

2.3.1 フィールドおよび研究参加者

本研究のフィールドは大阪府にある地域の日本語教室(A日本語教室)

である。学習活動はマンツーマンあるいは、ボランティア1名に対して学習者数名の小グループで行われ、始めの90分は各グループに分かれて学習活動を、その後自由参加による全体でのティータイムを行っている。学習活動のグループは基本的には固定であるが、年に数回グループを組み替えている。

そして、A日本語教室でボランティアとして活動している主婦の雅子さん（仮名）が本研究の研究参加者である。雅子さんはこの教室に参加するようになって8年目で、この教室だけでなく、地域の日本人と外国人が一緒におしゃべりできる場を提供するグループ（Bの会）にも参加しており、現在Bの会の代表をしている。この会は月に1回、A日本語教室の活動の前に開かれている。

雅子さんを研究参加者として選んだのは、私自身の経験に関係がある。私はA日本語教室で2003年の4月から活動しているのだが、その中で様々な葛藤や悩みを感じる事が多々あった。どうすればいいのだろうか、と悩む私の目に映る雅子さんを「うまいな、いいな」と感じる事がしばしばあり、私が現在「こうなりたい」と考えているボランティアの姿は、雅子さんから影響を受けている。そのため、私がひかれた雅子さんの経験を理解したいと考え、雅子さんに研究への参加を依頼した。

2.3.2 データの収集

2005年3月から2005年7月まで、週に一度、日本語教室の活動時間である10時30分から13時頃まで雅子さんの活動の参与観察を行い、フィールドノートとして記録した。活動は雅子さんがイニシアティブをとって進めたが、私も同じグループのメンバーとしてその場に参加し、学習者の方が困っているような時には積極的に助けるようなコメントをしたり、雅子さんと私で会話のモデルを示したりした。また、学習活動の前後に雅子さんと

私で、学習活動に関すること、自分のこと、教室のことなど様々な話をした。また、別に機会を設けてインタビューも行った。参与観察のフィールドノート、インタビューの文字化に加えて、私がつけている日記の全てをデータとして分析した。

分析の過程では、私の分析について雅子さんと話し、さらにストーリーを書き直していった。参与観察の期間が終わってからも、日記の形で雅子さんとのやりとりを記録し、データに加えた。日記の形での記録は2006年1月まで続けた。

3 雅子さんの力量

本章では、私が雅子さんと一緒に経験し、私が理解した「差をつける方がおかしい」「『ありがとう』と『ごくろうさま』」「相手との距離」という3つの、雅子さんの日本語学習支援活動における態度を述べる。

3.1 「差をつける方がおかしい」

日本語教室に参加している人の間に区別すべき差があるのかどうか、これは、私自身がよく考えることである。例えば、ボランティアと学習者はスタッフとゲストという関係になりやすいし、ボランティアの中でも中心的に教室の仕事を行う人と周辺的に参加する人、長く参加し続けている人と新しく来た人では教室内での活動の仕方や仕事の量が異なることがある。

A日本語教室では、毎年日帰りのバス旅行を企画している。参加者から集める参加費だけではすべてをまかなえず、教室の会計から援助しているという事情もあって、学習者よりもボランティアの方が参加費が高く設定されている年もあった。今年はどうなるのかな、とあって私が持ち出した話題だった。

雅子「私は（ボランティアと学習者に）差をつける意味がないと思う。ここは、私らが教えてあげますっていうところじゃなくて、一緒に勉強しましょうっていう所やから、差をつける方がおかしい。毎年（差をなくそうと）言ってきて去年から差をつけないようにしてもらった。」

[2005/06/22 フィールドノート]

雅子さんから「ボランティアと学習者に差はない」ということをはっきりと聞いたのはこれが初めてだった。もともとは金銭的な話だったのだが、こう言った雅子さんの口調が普段よりもきつく、「差はない」ということに関して強い主張を持っている、ということが感じられた。他のボランティアの人で「仕事は私たちがするから学習者の人たちは何もしなくてもいい」という考えの人もある。しかし、雅子さんのスタンスはいつも「いっしょにしよう」というものだ。この教室があるイベントで出店することになった時のことである。

（お茶の時間に）雅子さんは隣に座ったCさんに「この日暇？ 来て一。一緒にやりましょう」「手伝ってくれるん？」などと言っている。もちろん「遊びに来てくれるだけでもいいよ」とも言うのだが、「一緒に」とか「手伝って」という言葉を使うのは雅子さんらしいな、と感じた。

[2005/10/22 日記]

A日本語教室では、イベントなどがある時に学習者の人たちに負担にならないようにという考えから、なかなか「手伝って」とは言えないのが現実のようである。「遊びに来て」と誘いはしても、学習者の人から言ってくれない限り積極的に頼もうとはしてこなかった。私自身もこれに従って、学習者の人たちにイベントなどをお知らせする時にも、積極的にボランティアと同じ仕事をお願いすることはなかった。やはり、どこかでボランテ

ィアと学習者は別だと考えていたのかもしれない。しかし、雅子さんの声のかけ方はそうではない。

そして、雅子さんの「差はない」という態度はボランティアと学習者の関係だけでなく、ボランティア同士の関係でも同じである。雅子さんがA日本語教室でメンバーのみんなを驚かせた話としてよく話題に上るものがある。

去年の新年会の準備の時、ボランティアの中に男性が一人いるが、みんなは彼に大きい荷物がある時には車を出してもらおうようお願いをするけれど、他のこと（例えば調理の手伝いなど）はいいですよ、と言う。でも、雅子さんは「手伝って!」とお願いして、彼も快く引き受けてくれた。今でも笑い話のように登場するけれど、雅子さんは遠慮せず簡単に「手伝って」と言える人だな、と思う。それに、頼まれた人もちっとも嫌な気持ちにならない。それってすごいことだと思う。

[2005/08/23 日記]

フィールドワーク中は、A日本語教室の中で私が唯一の学生で、平日は学校がある、教室まで遠いという理由から、教室の仕事を減らしてもらうなど、仕事が負担にならないよう配慮してもらっていた。このように私の状況を考え、気遣ってもえらえたことはありがたかったのだが、その反面、いつもあまり手伝えないことで申し訳ない気持ちになることも多かった。そんな中、雅子さんから「じゃあやってもらおうよ」「手伝って」と声をかけてもらったことは本当にうれしかった。もちろん時間的な制約があったため、なんでもできるわけではなかったが、初めから「別にしなくても大丈夫だよ」と言われて区別されるのではなく、「できる範囲でいいから手伝ってね」と言われ、他の人との区別なく扱ってもらえることで、居心地の悪さがなくなった。

雅子さんが参加している「Bの会」でのことである。「Bの会」では、毎月順番に自分の国の写真を持ってきてもらったり、一緒に料理を作ったり国の文化を紹介してもらったりしている。そして、みんなでその国の話をしたり、もっと詳しく教えてもらったりしながら楽しい雰囲気の間を過ごしている。おしゃべりをしている中で、雅子さんが次の会で自国について話してもらえないかと打診している姿をよく見かける。

テーブル上の地図を囲んで、みんなが話している。旅行に行ったことがあるという話や、出身地の話などさまざま。その時、雅子さんが「そういう次話して」と言った。近くにいたOさんやHさんもすぐに、「うん、聞きたいわぁ」と同調する。頼まれたCさんは、「料理もしないしできないです」と言う。でも、みんなは「準備とか手伝うし、お料理もなくていいよ」「Tさんと一緒にやってもいい」と引き下らない。隣にいたTさんはやってみてもいいかな、という顔をしている。雅子さんは、「写真持ってきてくれたりとか、なんかお話ししてよ」と言っている。Cさんは「えー」と言いながら笑っていた。

[2005/05/14 フィールドノート]

雅子さんは頼みごとをするのが上手なのか、最初は「できない」と言っていた人を、いつの間にか話してもいいかな、という気にさせ、その人を主演にしてしまう。上に引用した時にも、最終的にはCさんが話してくれることになった。

雅子さんは、「もちろん参加してくれるだけでもいいんやけど、もしできるんだったら、私らが色々するばかりじゃなくて、どんどんチャレンジしてくれたら、自分からいっぱい話したりもできるし、お客さんだけで終わらない(2005/08/07 インタビュー)」と言うように、参加者を単なるお客さんとして区別するのではなく、みんなが同じように参加するのが

よいと思っているのである。

3.2 「ありがとう」と「ごくろうさま」

雅子さんがよく使う言葉に「ありがとう」と「ごくろうさま」がある。

今日参加した「Bの会」で思ったのは、雅子さんはほぼ全員に「ありがとう」と声をかけている（中略）。雅子さんはUさん（今回自分の国を紹介してくれた人）に対する配慮がすごい。英語がわかることと「Bの会」のホスト役だということがあるのかもしれないけど、一人で作業しているUさんに話しかけに行ったり、他の人が彼と話している時には自分の用事を済ませたりしていた。そして、部屋に新しく誰かが来た時、誰かが帰る時には必ず入り口のところまで行って「ありがとう」と声をかけていた。

[2005/04/09 日記]

「ありがとう」や「ごくろうさま」という言葉を学習者、ボランティア問わず、みんなに向けて雅子さんは使う。私はボランティアの中ではこの教室に来ている日数が浅い方だし、主婦がほとんどという状況であるため、「学生なのに来ていてえらいね」と特別に扱われているように感じることも少なくなかった。

公民館に入ってすぐコピーをしている雅子さんと会う。「おはようございます」と挨拶をすると、「おはよう、ごくろうさま！」と笑顔で返してくれた。私がお願いして来させてもらってるのに、なんか「ごくろうさま」は変だなと思った。

[2005/04/20 フィールドノート]

雅子さんに「ごくろうさま」と言われると、私がここにくることがごく普通のことで特別なことではないと思うことができ、「迎え入れられてい

る」と感じられた。

ある学習者の人が久しぶりに教室へ来た時のことである。

雅子さんと一緒にロッカーの中の教材を探していると後ろから学習者の方が来て、「先生おひさしぶりです」と声をかけてきた。雅子さんは「あーXさん、お帰りー!!」と彼女に抱きついた。(中略)そして、「これお茶です」と赤い紙袋を雅子さんに手渡した。雅子さんは、「ありがとう! 後でみんなで飲みましょう」と言った。(中略)しばらく廊下で話をしていたが、Xさんを部屋の中へ連れて行って、みんなに「きてくれたよー」と報告している。

[2005/04/13 フィールドノート]

教室に来てすぐはXさんは自分から部屋へ入ろうとしなかったのだが、雅子さんが部屋へ引き入れた。そして、学習活動が終わりお茶の時間になると、雅子さんは「みなさーん、このお茶はXさんのおみやげです」と紹介した。久しぶりということで、Xさんは教室に入りにくそうにしていたが、他の人がみんな口々に「ありがとう」「いただきます」と言い、楽しいおしゃべりが始まったのである。誰よりも率先して「ありがとう」と大きい声を出す雅子さんのおかげで、お茶を飲み終える頃には、Xさんはすっかりうち解けてみんなと話していた。雅子さんやみんなが言った「ありがとう」がXさんの不安を取り除く助けになったと言えるだろう。

3.3 相手との距離

私 「雅子さんは人の輪を作るでしょう? それがすごくうまい」
雅子「(初めて会う人たちの中へ) 入って行ってすぐに友だちになれると思う。誰でもすぐにしゃべれるからかなあ。それと、しゃべればしゃべるほど自分に知らない情報がいっぱいあるから楽しい。日本人

同士ってある程度意識は同じだけど、外国の人としゃべっているとその違いを感じるからそれもすっごい発見で。」

[2005/08/07 インタビュー]

雅子さんは、普段から相手のことや自分のことを積極的に話す。いつも相手のことに興味を持って話しかけることで、「お互いに踏み入れてもいい部分かどうかもわかってくるから、もっと親密になれる（2005/08/07 インタビュー）」という。そして、心理的な距離感だけでなく、物理的な距離も雅子さんは簡単に縮めてしまう。

Dさんが雅子さんの方を向いて「できた」と言うと雅子さんは身を乗り出してDさんのプリントを読んでいる。Dさんのペンを借りてチェックをつけていく。「これはこうね」と言いながら間違っているところを書き直してあげている。（Dさんに）近づいていたからちょうど目に入ったのだろうか。Dさんのネックレスをさわりながら、「すてきねーDさんのこれすてきねー」と言った。

[2005/04/20 フィールドノート]

この日、雅子さんのグループはDさん、Kさん、雅子さん、私の4人だったので、長机を2つ並べて2人ずつ座っていた。私の隣が雅子さん、私の前がDさん、雅子さんの前がKさんの順だった。雅子さんとDさんは対角線上だったので遠かったのだが、雅子さんは机の上に身を乗り出すことでその距離を簡単に縮めてしまった。

今までDさん一人と雅子さんというペアで活動をしていたのが、Kさんと私が加わって大所帯になった。「Dさんはいつも話したいこと、聞きたいことがたくさんある」と雅子さんから聞いていたとおり、た

くさん話そうとした。(中略) DさんはKさんが話している時、雅子さんの方を向いて待っている。Kさんが終わって次はDさんの番だ。Dさんは、堰を切ったように話し始めた。

[2005/04/20 フィールドノート]

複数人で一緒に活動する時、どうしてもその中の一人にボランティアの注意が向いてしまわざるを得ない時がある。雅子さんは、話したくてうずうずしているDさんとの物理的な距離を近づけることで、「話したいことを用意してまってくれている」Dさんに応え、Dさんは雅子さんに向けて思いきり話すことができるのである。

4 日本語ボランティアとホスピタリティ

雅子さんが、誰に対しても区別することなく同じように接し、「ありがとう」「ごろうさま」という言葉をかけ、相手との距離を簡単に縮めたりすることから、私は雅子さんが他のみんなを「この場に迎え入れ」ようとしていることがわかった。何よりも私自身が「この場にいてもいいんだ」と迎え入れられていると感じ、自分も楽しみながら活動する中で、他者を気持ちよく迎え入れている雅子さんは「ホスピタリティ」の気持ちを持って活動しているのではないかと思われた。以下は、私が雅子さんと「ホスピタリティ」について話した時の言葉である。

雅子「んーそんなこと考えたことがなかったけど、自分ができることをすればいいかな、って考えてやってるだけ。でも、人と人の関わりだから楽しい」「そんな風に言ってもらえるのはうれしい。(学習者の人が教室に) 次も来たいと思ってほしいし、自分も楽しみながらやってるから。私たちがそういう場を提供したいと思ってやってきたから、それはホスピタリティかもしれない」

[2005/10/8 日記]

磯田 (2004) によると、「ホスピタリティ」は一般に「もてなし」「歓待」「厚遇」と訳されているが、その意味はもっと重厚なものであるという。ホスピタリティの語源であるラテン語の *hospes* は主人 (*host*) と客人 (*guest*) の両方の意味を含み、主人と客人が同一の立場に立つ態度を常に保つという意味がある。つまり、ホスピタリティの概念では、主人と客人は常に対等となる。この背景には、主人と客人が互いに認め合い、理解し合い、信頼し合い、助け合い、依存し合い、互いに発展し合うという常に双方向の人間関係がある (服部 2004)。また、この関係は半永久的に続くものである (磯田 2004)。

これに対し、ホスピタリティと似た場面で用いられる「サービス」の概念は、主従関係や軍事目的、宗教上の儀式など、常に義務の観念が強く意識され、行動の中心となるのは、自分を抑え、利益や対価を獲得するための義務的・機能的行為であって、お互いの相互関係は希薄なものであるという (磯田 2004)。サービスとの比較からもホスピタリティの「お互いに対等な関係である」という特徴が強調される。また、福永 (1998) は、ホスピタリティを持って、互いに満足感を得ることができる友好的な関係は、「十分な感受性と理解力に基づき、自己の可能性と特徴をできる限り発展させ、(中略)しかる後につくりあげられるそのような個人と個人の関係 (p. 145)」であると述べている。つまり、個人レベルの価値判断や考えを非常に重要視し、自分自身の判断で自発的に行うのがホスピタリティであると言える。

日本語ボランティアにおけるホスピタリティについてであるが、ボランティア活動一般の本質である「自発性」と、地域の日本語教育において重要だとされて久しい学習者と支援者が「ともに学ぶ」という姿勢を理解し、どのような態度で学習者と接することが求められているのかを考える時に、ボランティアがホスピタリティの気持ちを持つというのは一つの答えにな

るだろう。「ともに学ぶ」というのは、ボランティアはいつも支援し、学習者はいつも支援されるという「教える－教えられる」という決して対等だとは言えない関係の批判から、双方が「ともに学ぶ」ことができる活動を指すものであるが、単に「ボランティアも学ぶ」という理解だけでは十分ではない。ホスピタリティの気持ちを持つことで、お互いを尊重し、対等な関係を築きながら、双方に必要だと考えられる活動を行うことができるのではないだろうか。

5 おわりに

ホスピタリティは個人の自発性によると述べたが、それではどうすればホスピタリティの気持ちを持ったボランティアになれるのだろうか。

井上(2006)は「ホスピタリティはマニュアル化をすることは難しいスキルである」と述べた上で、ホスピタリティを醸成するための例として、あるサービス産業において、仕事のマニュアルとは別にコンセプトとなるキーワードを提示し、マニュアルを越えた部分で個人がそのキーワードから判断して自発的に行動することが推奨されていることを紹介している。個人の判断基準によるところが多いものの、コンセプトを共有することで、企業が目指すホスピタリティが実践されているのである。

日本語教室においても、その教室が目指すものや、ボランティア自身の「こうなりたい」という考えを他の人と共有し、教室のメンバーでコンセプトを共有することで、単にボランティアの自発性にまかせるというのではなく、個々人がホスピタリティの気持ちを持ちやすいように働きかけることができるのではないだろうか。明確なコンセプトがあれば、個々のボランティアがそれを実際の活動にどのように生かしていくのかを考えながら、自分のしていることを振りかえるきっかけにもなるだろう。また、教室固有のコンセプトは、その教室がどのような活動を行っているのかを他

の人に伝え、理解してもらおうためのツールにもなるはずだ。

注

- 1) 尾崎 (2004) では、「学校型」には、「学習者が一定の要件を満たしていなければ入学できないという『選抜』を行い、教師は教えることに、学習者は学ぶことに義務と責任を負うという暗黙の『契約』を交わしている」こと、「地域型」には「だれでも教授者になれ、学習者にも受講制限がない」という特徴があることを指摘して両者を特徴づけている。

参考文献

- Clandinin, D. J. & Connelly, F. M. (2000). *Narrative Inquiry: Experience and story in Qualitative Research*. Sans Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Freeman, D. (1989). Teacher training, development, and decision making: A model of teaching and related strategies for language teacher education. *TESOL Quarterly*, 23/1, 1989, 27-45.
- 青木直子 (2004)『接触会話における在日外国人の日本語習得に影響を及ぼす心理的・社会的要因の研究』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 磯田圭子 (2004)「ホスピタリティとその教育の可能性についての一考察」『安田女子大学紀要』32、177-192.
- 井上岳一 (2006)「挨拶の背後にあるもの — サービスとホスピタリティの違い —」日本総研ホームページ、最終アクセス日：2006/08/18
<http://www.jri.co.jp/consul/column/data/464-inoue.html>
- 尾崎明人 (2001)「日本語教育はだれのものか」青木直子・尾崎明人・土岐哲 (編)『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社、3-14.
- 尾崎明人 (2004)「地域型日本語教育の方法論的試案」小山悟・大友能子・野原美和子 (編)『言語と教育 — 日本語を対象として』くろしお出版、295-310.
- 野山広 (2002)「地域社会におけるさまざまな日本語支援活動の展開」『日本語学』21 (6)、6-22.
- 野山広・有田典代 (2004)「コーディネータに必要な資質と能力」文化庁編『地域日本語学習支援の充実 — 共に育む地域社会の構築へ向けて —』国立印刷局、115-116.
- 服部勝人 (2004)『ホスピタリティ・マネジメント入門』丸善株式会社

- 福島和子 (2004) 「大阪府の識字・日本語教室の現状と課題 — 大阪府教育委員会「識字学級等調査」から —」『部落解放研究』159、58-66.
- 福永昭 (1998) 「ホスピタリティ教育の理念と実際における検討課題について — ホスピタリティ・リレーションの構築 —」『亜細亜大学経営論集』33-2、141-151.
- 森本郁代 (2001) 「地域日本語教育の批判的再検討 — ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」野呂香代子・山下仁『「正しさ」への問い — 批判的社会言語学の試み』三元社、215-247.
- 山田泉 (2004) 「日本語ボランティアの今とこれから」『月刊日本語』2月号、8-9.
- 李曉博 (2004) 「日本語教師の専門知についてのナラティブ的理解」『阪大日本語研究』16、83-113.

(大学院博士前期課程修了)

SUMMARY

What kind of competence is required from Japanese volunteer?

Keiko KAWASHIMA

In current studies on Japanese language class for foreign residents, the focus had not been applied to the individual volunteer. In today's society there are various people who show interest on volunteers in Japanese language field and more people engage in volunteer activities. Simply knowing Japanese, however, does not imply that anybody could engage in voluntary activities requires certain competence.

Based on participant observation, interview and interaction between the author and Masako, the research participant, this paper explores the competence that lies behind her practice. Particularly on what kind of practical knowledge she has and how it appears in her practice.

The attitude of hospitality is referred to be the essence in Masako's practice.

キーワード：地域の日本語教室 ボランティアの力量 態度
ホスピタリティ